



片山 明彦 先生

略歴

1999年 東京歯科大学 卒業
 1999年 慶應義塾大学医学部歯科・口腔外科学教室
 2001年 東京歯科大学歯周病学講座
 2005年 東京歯科大学助手（歯周病学講座）
 2007年 稲毛デンタルクリニック 開業
 2013年 有楽町デンタルオフィス 開業
 慶應義塾大学医学部 歯科・口腔外科学教室 非常勤講師
 東京歯科大学水道橋病院 臨床講師
 日本歯周病学会 専門医・指導医・評議員
 日本口腔インプラント学会 専門医
 日本臨床歯周病学会 認定医・歯周インプラント認定医

歯周組織再生療法におけるマテリアルの選択

有楽町デンタルオフィス

片山 明彦

われわれ日本歯周病学会専門医・認定医における約2500名に対して行った歯科健診において歯周病患者は90%，そのうち中等度以上の歯周炎患者は40%という結果を得た。国内にはまだ潜在的な歯周病患者は多いと考えられ，中等度以上の歯周炎患者の一部に対しては歯周組織再生療法が適応になると考えられている。

今日，歯の保存への流れが進む中で，歯周組織の再生治療は，1960年代に骨移植から始まり，80年代にGuided Tissue Regeneration (GTR) 法，90年代にエナメル基質タンパク (EMD)，2017年には国内発，遺伝子組み換えヒト型塩基性線維芽細胞成長因子 (bFGF) リグロス[®]が臨床応用されるようになりました。歯周組織再生には組織を構築する細胞，細胞が増殖する自家骨・人工骨などの足場 (Scaffolds)，細胞の挙動に刺激を与えるEMDやb-FGFなどの生理活性物質 (Signaling Molecules)，そして細胞に栄養を供給する血流が必要となります。これらの4つの因子が揃ったときにより高いゴールが得られるとされます。

一方，Cortelliniらは歯周組織再生療法を成功させるための重要なポイントは，Patients Selectionからはじまり，1. 創傷の保護 (Site protection) 2. 再生に必要なスペース (Space) 3. 血餅の安定 (Blood clot stability) としています。これらを成し遂げるためには術者のスキル，テクニックなど重要であり，フラップデザインなど軟組織の扱い，バイオマテリアルの選択，縫合法なども重要な要素となります。フラップデザインについての歯間部の切開方法もさまざまな術式が報告されていますがCortelliniらにより報告されたMIST (Minimally invasive surgical technique) やM-MIST (Modified minimally invasive surgical technique) がアタッチメントゲインの獲得が最もよいとされています。またバイオマテリアルについては現在，さまざまなマテリアルが選択可能であり，それらの単独応用，また組み合わせたコンビネーションセラピーなどが紹介されています。しかしどの材料を選択するのか，どのコンビネーションがベストなのかは議論の分かれるところでもあります。

今回，EMD，リグロス[®]とBio-Oss[®]・Bio-Gide[®]などを併用した様々な歯周組織再生療法の臨床例を供覧させて頂き皆様とともにどのように成功に導くかを考えてみたい。